

文化を創る（第3回）——名づけえぬ仕事

金井純

三宅一生デザイン事務所 USA 代表

KCI's 40th-anniversary Interviews (3)

Jun KANAI

Issey Miyake U.S.A. Corp.

Taking the opportunity of celebrating the 40th anniversary of its founding, the Kyoto Costume Institute (KCI) interviewed prominent figures who have an important association with the KCI. In the third interview, we talked with Ms. Jun Kanai from Issey Miyake U.S.A. Corp., who was involved in the holding of the exhibition “Inventive Clothes 1909-1939” in Japan in 1975 and the establishment of the KCI.

Ms. Kanai returned to Japan after graduating from an American university in 1966 and left again for the US in 1969 after she married. In New York, she joined the editorial department of the fashion and lifestyle magazine “Vogue” and worked under Ms. Diana Vreeland, a legendary editor. After that, she served as a contact point in New York for bringing to Japan “Inventive Clothes 1909-1939,” an exhibition curated by Ms. Diana Vreeland and presented at the Metropolitan Museum of Art.

Mr. Koichi Tsukamoto, founder of Wacoal Corp., who was deeply involved in the holding of “Inventive Clothes 1909-1939” in Japan in 1975, established the Kyoto Costume Institute in 1978. Since then, Ms. Kanai devoted herself to collecting historical costumes for the KCI. Ms. Kanai says that in retrospect, her connections in New York contributed greatly to the development of the KCI's activities. She received useful advice from Ms. Diana Vreeland and Ms. Stella Blum from the Metropolitan Museum of Art about how to collect historical costumes. Without the help of Ms. Blum, the “Evolution of Fashion 1835-1895,” an exhibition that featured a collection of costumes gathered by the KCI (held in 1980 in the National Museum of Modern Art, Kyoto), could not have been held, Ms. Kanai says. In addition, the Metropolitan Museum of Art's Costume Restoration Department generously provided training and technical support on the restoration of costumes for newly hired KCI restorers. Ms. Elizabeth Lawrence from the same department taught KCI staff about the importance of developing mannequins, which eventually led to the development of KCI's mannequins, which are currently being used in the exhibition gallery for

costumes from around the world.

Ms. Kanai explained that what is important for the KCI in its future activities is to contemplate what should be conveyed in exhibitions. She also said that she wants a new generation of people to consider in what direction the KCI should go and how it should be kept in existence and maintained.

昨年(2018年)、KCIは設立40周年を迎えました。『Fashion Talks...』では前々号よりそれを記念し、過去を振り返るとともに未来を見据えるため、これまで財団に貢献くださった方々を中心に連続企画としてインタビューを実施しています。第3回は前号の小池一子さんとともにKCI設立のきっかけとなった1975年の「現代衣服の源流展」から尽力され、とくにKCIコレクションの収集の面で多大な貢献をいただいた金井純さんにお話を伺います。

アメリカより——「現代衣服の源流展」実現まで

金井: 私は、三宅一生さんがブランドを設立する頃から彼の仕事を手伝ってきました。その縁があって三宅さんが深くかかわった「現代衣服の源流展」の京都開催やKCIの設立にも携わることができました。ニューヨークに住んでいたのも、京都での実務や服飾の研究自体へのかかわりが少なかったですし、役割も時代に応じて変わってきました。成果についても、私個人が成し遂げたというより、当時、周りにいた人たちが皆さん素晴らしくて、その方々と一緒にチームワークでやってきた、という思いが強いです。

KCIが設立40周年を迎えたと聞いて、過ぎた歳月の長さに感慨深く思いますが、振り返るとKCIは、塚本幸一さんと三宅一生さん二人の深い思いが重なったことで生まれたものだ、という印象を強く持っています。

本題からは脇道にそれた昔話から始めてしまうのですが、私は子供の時から、アメリカの大学で学びたいと思っていました。初心かなって、4年間アメリカの大学に行き、1966年に卒業しました。就職の際に以前からファッションが好きだったので編集者になりたいと思い、当時若い女性たちに一番人気があった『グラマー』というファッション誌の面接を受けました。すると、出版社の人事部の女性部長から「入りたいのであれば雇いますよ。ただし、ここで働いたらあなたは大学を卒業したての one of them の女性になるだけです。それよりも、あなたが日本に帰ってこの4年間の経験を生かして、いかに社会にお返しをする

のかということの方が大切ではないですか」と問われてしまいました。その言葉に納得して私は日本に帰国し、国際羊毛事務局ファッション部などに勤めたのですが、結局、結婚を機に69年末より再びニューヨークで暮らすことになりました。

ニューヨークでは最初は『ヴォーグ』の編集部に入社しました。その時の編集長が今では伝説的なダイアナ・ヴリーランドさんでした。彼女はその後メトロポリタン美術館のコスチューム・インスティテュートに移ることになるのですが、私は彼女の編集長としての最後の6ヶ月程の間は編集部の端くれで仕事をしており、大変可愛がっていただきました。

73年12月に彼女の監修によって開催された展覧会が、「The Tens, Twenties, and Thirties: Inventive Clothes, 1909-1939」です。私はこの展覧会を見て大変衝撃を受けました。もちろん、以前からファッションの展覧会はありましたが、メトロポリタン美術館のコスチューム・インスティテュートには服飾史や衣裝修復の専門家がいらっしゃることも知っていました。けれども、それまでの展覧会は古めかしい衣装の展示という印象が強くて、ファッションという現代性を感じさせるものではありませんでした。しかし、この展覧会ではポアレから始まりヴィオネ、スキヤパレリ、シャネルといった50年も60年も前のデザイナーたちの服がモダンに展示されていて、本当に目から鱗が落ちた思いでした。

少し話が前後しますが、三宅一生さんとはまだ結婚もしていなかった金井淳の紹介で69年の夏にNYで知り合い、彼が70年に三宅デザイン事務所を設立した時から少々のお手伝いをしていました。彼は毎回アメリカに来るたび、「純、何か面白い展覧会やっていない?」と聞かれました。そして73年の「Inventive Clothes」展。「とにかくメトロポリタン美術館に行ってください」とお願いしました。展覧会を見た三宅さんも大感激で、とくにヴィオネについては、「僕が考えていたことを50年前にやった人がいる」と興奮していました。彼は一緒に渡米してロサンゼルスに滞在していた小池一子さんと皆川魔鬼子さんに連絡して、「すぐにニューヨークに飛んで、この展覧会を観に来てください」と呼び寄せられたくらいでした。

KCI: 前号の小池さんの話とつながってきて非常にわくわくしますね。その後、どのようにして「現代衣服の源流展」の開催に至ったのですか。

金井: 三宅さんはどうしてもこの展覧会を日本の人にも見せたいという気持ちを強く持たれました。当時、三宅さんはワコールとボディウェアや靴下、ストッキングの共同開発を71年から行って、塚本幸一さんとも懇意にしていました。同じ頃、塚本さんは京都商工会議所の副会頭になられたばかりで、京都をファッション産業で盛り上げたいと考えておられた。この2人の話し合いで展覧会誘致の企画が始まりました。そして、この展覧会の開催が後にKCI設立へともつながっていくのです。

展覧会を京都にもってくるにあたって、まずはミセス・ヴリーランド、そしてメトロポリタン美術館の許可をもらわないといけません。私は先程述べたように、ミセス・ヴリーラン

ドとは『ヴォーグ』誌にてご縁があったということもあり、ニューヨークでの交渉の窓口を担うこととなりました。彼女は三宅さんのことも以前から知っていました。その数年前、ブランド立ち上げ直後の彼の作品をお見せした時に「このデザイナーはすごく才能があるから、コレクションをつくったら持っていらっしやい」と言われて、それからずっと彼を支援していました。

ミセス・ヴリーランドは京都での展覧会開催のことを大変喜んで承諾してくださいました。ただ、この話をした時には展覧会は既に終了していて、巡回もしていませんでした。この展覧会は世界中の様々な美術館から衣装作品を借用していました。パリ市衣装美術館、フランス衣装芸術協会(UFAC)、フィラデルフィア美術館、シカゴ歴史学会、ブルックリン美術館とかいろいろ……。ですから、もう一度この展覧会を開催するには、世界中の美術館に依頼して一から借用の許可をもらわなければなりません。そのための交渉に世界中の所蔵館のほとんどを回ったのが三宅さんでした。京都国立近代美術館で行うことになっていましたが、運営の中心は展覧会開催の経験のない京都商工会議所でした。本当に大変なことだったと思います。本人も苦勞したと言っていました、楽しかった面もあったのではないのでしょうか。それぞれの場所で素晴らしい収蔵品を間近に見ることができて、その時の色々なエピソードを話してくれましたし、UFAC のイヴォンヌ・デランドルやパリ市衣装美術館のマドレーヌ・デルピエールといった専門家の人脈を広げることができました。こうしたつながりが、KCI 設立の際にも生かされています。

展覧会に話を戻すと、三宅さんの美術館巡りのおかげですべての借用許可をもらうことができました。メトロポリタン美術館の展覧会を京都でもう一度開催することが実現する運びとなったのです。それが75年の「現代衣服の源流展」です(Fig. 1, 2)。展示デザインは杉本貴志さんのスーパーポテト、アートディレクターは田中一光さん、マネキンは七彩、と今からすれば夢のようなメンバーが集まりました。その後も KCI や三宅さんが一緒に仕事をする人たちです。

基礎作り——衣装の収集、KCI マネキンの誕生

金井：「現代衣服の源流展」は大成功をおさめました。それまでこの種の展覧会が日本で開催されたことはありませんでしたし、ようやく既製服が一般的になった頃で、歴史的工芸品としての着物を取り扱うようには、ファッションを学問の研究対象として、また美術館の収集、展示品として考えることなど、十分にできていませんでした。そうした社会的状況のなかで開催したこともあって、大きな衝撃を与えることができたのだと思います。塚本さんも、大勢の方がファッションの展覧会に興味を示されたことに強い感銘を持たれました。これからは日本人もほとんど洋服を着るのだから、和服の歴史だけではなく洋服の歴史も深く

勉強しなくてはならないとお考えになり、衣服を収集、研究、展示する機関、京都服飾文化研究財団を作られる発端になりました。ちなみに、京都服飾文化研究財団は英語で The Kyoto Costume Institute ですが、これはメトロポリタン美術館の衣装部門の名前である The Metropolitan Museum of Art Costume Institute からいただきました。

財団を設立するための準備として、歴史衣装の収集をはじめることとなったのですが、どこでどういったものを探せばいいのか、どのように選べばいいのか、誰もわかりません。そこでアメリカに住んで、展覧会の海外窓口を担当した私に再びお声がかかりました。私は自分の仕事や育児もありましたし、何より服飾史の専門でもないので少々困ってしまいました。その時に助けてくださったのが、またしてもミセス・ヴリーランドとメトロポリタン美術館の学芸部長だったステラ・ブラムでした。今から振り返ると、あの頃は皆さんが心の広く、親切な時代でした。彼女たちの手助けがあって衣装の収集を始めることができました。日本の、京都でファッション史の研究機関を立ち上げようとしているからと、自分たちも購入している一流のディーラーの方たちを快く紹介してくれました。

衣装を集めることが決まっても何よりゼロからのスタートでした。予算の問題もありましたし、収集するにあたっては対象の絞り込みをしなければいけないと考え、私自身も理解しやすい女性服から集めることにしました。各時代のもっともファッションブルな服、時には個人的な嗜好も入ったのですが、美しいもの、状態の良いものを選べるだけ選びました。それから、ランジェリーやシェイプメーカーといった女性下着。コルセットやバスルは彫刻的なフォルムを持っていて興味深いものでした。ところが当時は積極的に収集する機関がなかったので素晴らしいものに巡り合う機会が多くありました(Fig. 3, 4)。

ディーラーには気難しい方もいらっしゃったのですが、運よく皆さんに気に入ってもらえて、それ以後もよい関係を築くことができました。オークション、骨董市、蚤の市もよく徘徊しました。今でも、二人の子供たちの退屈な週末の思い出としての蚤の市が話題になります。この時期に購入した衣装のなかで、特に印象に残っているのは、黄色のストライプの18世紀ドレスです(Fig. 5)。

衣装の収集が始まり、78年にKCIが設立されました。集めた衣装が良質だったこともあり、展覧会を開催しようということになりましたが、展覧会の企画を統括する監修者が必要でした。そこで私は「現代衣服の源流展」やディーラーの件で大変お世話になったステラ・ブラムに相談しました。ステラは快く承諾してくれて、19世紀の衣装の変遷をたどる展覧会を提案してくれました。スリーブが大きかった1830年代から、再びその流行が現れる1890年代までを中心とした展覧会です。この時期はちょうど日本も開国、明治維新と、海外の影響を大きく受けた時期です。本当に素晴らしい着眼点でした。それがKCI設立後、初めての展覧会となった「浪漫衣裳展」(1980年)です。実現するにあたって、展示や照明のノウハウもほとんど日本にはありませんでした。当時アメリカのデパートのウィンドウ

ディスプレイで、大変カッコいい展示を手掛けていたロバート・カーリーに依頼しました。彼もまた快諾してくれて、マネキン着せつけにスティーヴン・ピートリと照明のブライアン・トンプソンが加わってくれました。ブライアンは当時最新の熱を出さない照明を使用したいと言いました。日本にはまだその機材が流通していなかったため、アメリカで機材一式を調達して、輸送する手続きをしました。スティーヴンはその後メトロポリタン美術館をへて、パリでサンローランアーカイヴの担当にまでなりました。今考えてみるとかかわったメンバーで、かけた費用も本当に贅沢でした。

他にも「浪漫衣裳展」を企画するなかで、私はメトロポリタン美術館の大変素晴らしい修復作業をみせてもらいました。KCIは衣装の収集を始めたばかりでしたが、今後それらを次世代にまで保存し、展示にも耐えられるような修復の技術が必要不可欠でした。KCIの新規採用された補修スタッフが、メトロポリタン美術館で短期間の研修を受けさせてもらえるよう手筈を整えました。その時、大変親切に教えてくださったのが修復担当のエリザベス・ローレンスでした。リズ〔エリザベス〕は歴史的衣服用マネキンについて多くの経験とアイデアを持っていた方で、彼女のマネキンに対する長年の要望を、七彩の大野木啓人さんの協力の下で実現したものが、KCI時代マネキンです(Fig. 6)。KCI時代マネキンは、現在でも多くの海外の美術館でも使用されています。立ち上がりの時期でさまざまな試行錯誤がありましたが、このように多くの専門家の力添えのおかげでKCIの基礎を作ることができました。

KCI: KCIの骨子となる部分を前号の小池さんは日本から、そして金井さんはアメリカから作られたプロセスが大変伝わってきました。収集された作品は貴重で状態も非常に良いものが多く、現在のKCIコレクションの核となっています。金井さんのご尽力はキュレーターやコンサバターなどといった、たんなる肩書では説明しえない、還元しえない活動だと思います。ディーラーとのつながり、KCI時代マネキンの制作、こうした収集や展示の基礎が形成されたからこそ、今のKCIがあるように感じます。その他にとくに印象に残っている展覧会はありますか。

金井: モードのジャポニスム展——これは収集していた作品に長く携わっている間に、深井さんと二人ではたと気が付いたことです。私はもっと漠然とオリエンタリズムと思ったのですが、深井さんがジャポニスムと絞られました。この展覧会で、世界の歴史衣装美術館の中でもKCIの使命が明解になりました。また17世紀から現代までの日本と世界の衣服の関わりをみることで、常にいつの時代でも新鮮に考えることができる衣服史のテーマであると思っています。KCI収蔵品の中でも特に感銘している服は1920年代のマダレーヌ・ヴィオネの緑のピントックドレスです。これはデザイン、技術共に目が眩むような最高峰の作品だと思います(Fig. 7)。

展覧会と KCI の今後

KCI : KCI は昨年 40 周年を迎えました。また今年は 5 年に一度開催している京都国立近代美術館との共催展覧会を予定しています。そこで今後のファッション展のあり方について、また未来の KCI 像についてご意見をお聞かせください。

金井 : 私たちは何もないところからはじめました。だから、ある意味ではやること全てが新しかった。時代にも恵まれていました。塚本幸一さん、三宅一生さんという大きなヴィジョンを持った二人の夢のプロジェクトでした。私たちは本当に幸運でした。

しかし、今は様々なことが当たり前となっていて、満たされている。一方で、美術館はもはや他の娯楽と勝負しないといけない。海外では、毎年毎年展覧会を開催しなければならず、最近では運営資金もそこで調達して、メディアでの話題ばかりが先行してしまっている美術館もあります。美術館で意味のある展覧会を行うというのは本当に難しくなっています。KCI は美術館という箱を持っていません。施設がないことは残念なことでもあります。反面、自分たちのペースで展覧会を企画、研究して、現在は 5 年に 1 度開催することができる。だからこそ重要になってくるのは、展覧会で何を伝えたいのかということです。その情熱はもちろん全ての人とはいいませんが、多くの人にきっと伝わって、心を打つものになるはず。こうした満たされた時代だからこそ、何か新しいことに情熱をもって挑戦して欲しいと思います。

KCI は 1970 年代という早い時期から大きなヴィジョンをもって設立された組織です。そして、様々な人たちの寛大さに支えられて、素晴らしい衣装コレクションを所蔵する、世界でも知られる研究機関に、大きく成長することができました。良いコレクションがあって、衣装の修復や展示のノウハウもある。ただ、私が今一番心配しているのは、この素晴らしい財団が今後も一つの企業の支援だけで運営できるのかということです。もちろん、現在の状況が継続できるのであれば良いのですが、世界的にみても、やはり財団の活動を維持しようとした場合、莫大な資金が必要です。研究、人材の育成、新しい収集、そして展覧会の開催と、全てにおいてです。アメリカの場合、国立の美術館というのはスミソニアングループのみで、メトロポリタン美術館をはじめとして、ほとんどが公益財団です。しかも、日本の場合と違って、多くは様々な企業や大勢の市民からの寄付によって支えられていて、組織内にはしっかりと寄付を集め、資金を運用する部門があります。たしかに、日本で同じようなことが出来るかどうか分かりません。これまで収集した、そしてこれからも集めていくことになる貴重な衣装を、ただ収蔵庫にしまっておくだけには行きません。収蔵庫に眠っているだけでは、それは古い服、古着なのです。それが素晴らしいアートとなるのはやはり人の手です。人の手に寄って、歴史的に正確に、それについて綺麗に着せつけて、展示することで作品になります。決して宝の持ち腐れにならないようにしてください。

今後の KCI をどのようなかたちで存続させ、維持していくのかということ、とくに新しい若い世代の方たちには是非考えてもらいたいと思います。今まで積み重ねてきたものをただつないでいくのではなく、新しい形の貢献を考えてほしい、若い人たちの力で新しい KCI を作ってほしいと思います。

KCI: 展覧会そしてファッションは何か華やかな漠としたイメージをもつことが多いように思います。しかし、展覧会だけではなくコレクションの意義など地道な作業ですが、私たちの足場を見つめることが重要であることを勉強させていただいたように思います。本日は誠にありがとうございました。

(聞き手：石関亮・小形道正)

[図版]

- Fig. 1 「現代衣服の源流展」展示風景 京都国立近代美術館 1975年 京都服飾文化研究財団所蔵
- Fig. 2 同上
- Fig. 3 AC405 部屋着用ジャケット 1890年頃 撮影：広川泰士 京都服飾文化研究財団所蔵
- Fig. 4 「アンダーカバー・ストーリー」展展示風景 原宿ラフォーレミュージアム 1983年 撮影：林雅之 京都服飾文化研究財団所蔵
- Fig. 5 (中央) AC14 ロープ・ア・ラ・フランセーズ 1770-75年頃 撮影：小暮徹 京都服飾文化研究財団所蔵
- Fig. 6 KCI時代マネキン (19世紀マネキン) 提供：七彩
- Fig. 7 AC8947 ドレス マドレーヌ・ヴィオネ 1924年 撮影：操上和美 京都服飾文化研究財団所蔵

金井純

ニュージャージー州ジョージアン・コート・カレッジ英文科卒業。帰国後、オーストラリア放送協会東京支局、国際羊毛事務局に勤務。1969年に再渡米。『ヴォーグ』『ハーバース・バザー』の編集者として勤務後、独立。設立時より三宅デザイン事務所 USA 代表。1979年から1999年まで京都服飾文化研究財団海外担当。2000年から2012年まで同財団評議員を務める。「華麗な革命展」の功績で深井晃子氏と共に、1989年第7回毎日ファッション大賞特別賞受賞。

(肩書は掲載時のものです)